資料1－2



マアジ（対馬暖流系群）①

マアジは日本周辺に広く生息しており、本系群はこのうち東シナ海～日本海に分布する群である。

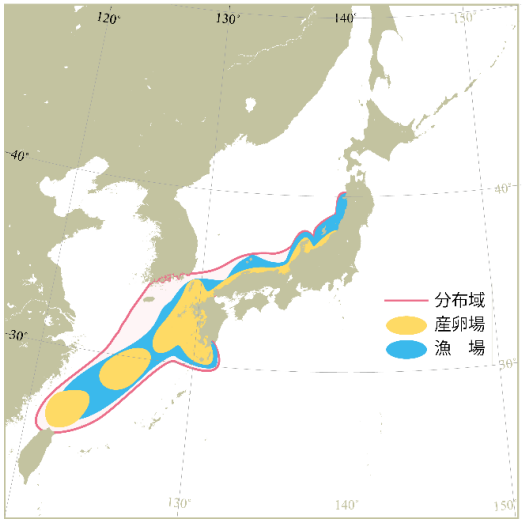


図1　分布域

東シナ海南部から日本海北部沿岸域まで広く分布する。

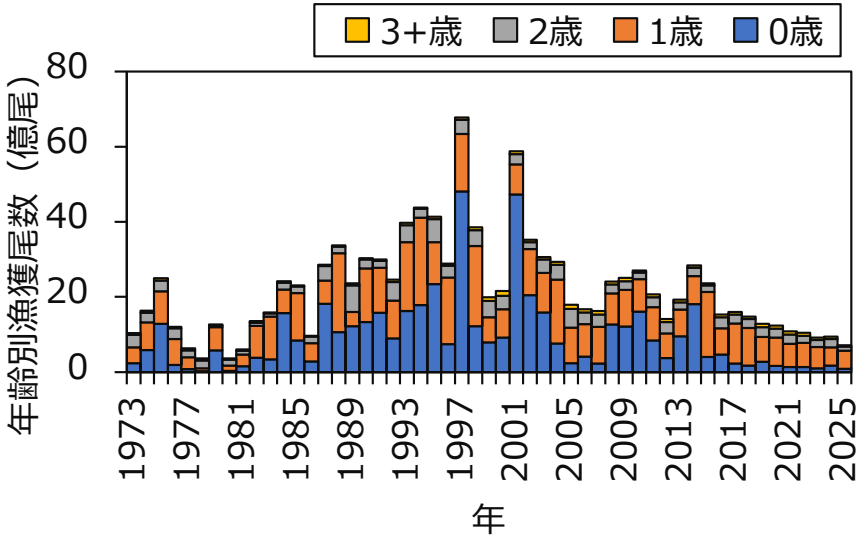


図3　年齢別漁獲尾数の推移

漁獲物の年齢組成を尾数でみると、2010年代後半以降は1歳（オレンジ）を中心に構成されており、0歳・2歳魚以上が占める割合は少ない。

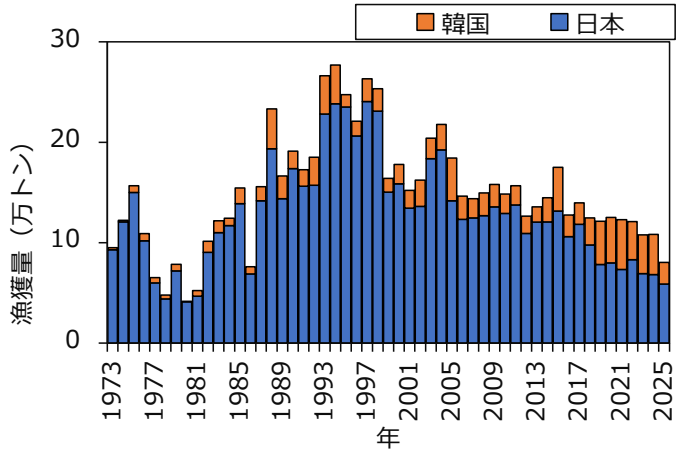
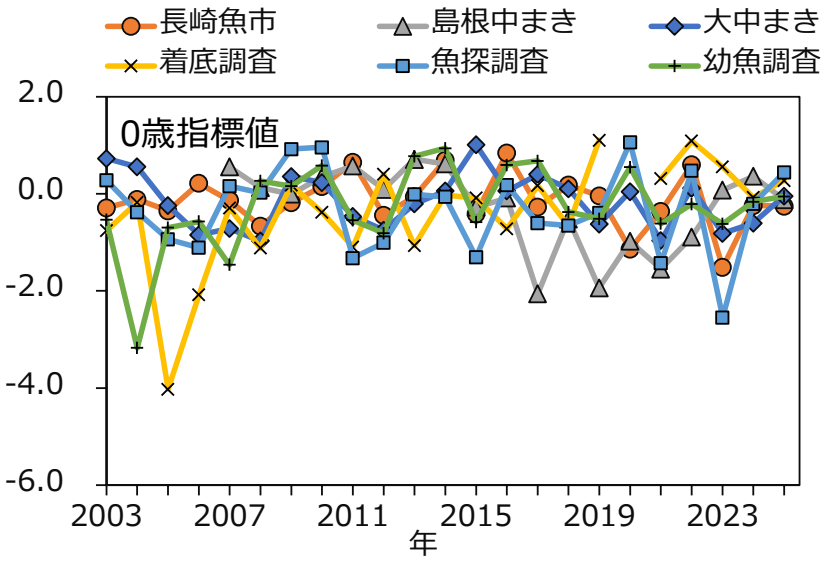
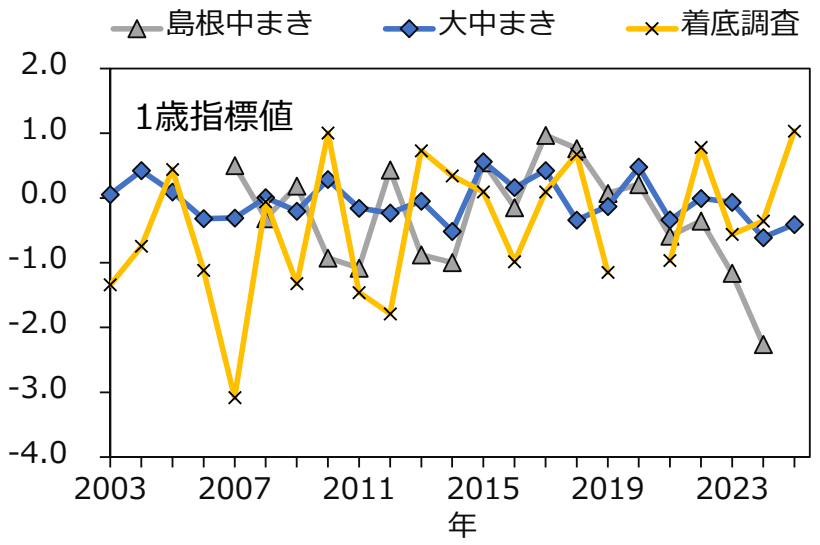


図2　漁獲量の推移

日本と韓国を合わせた漁獲量は、1980～1990年代に増加し、1988、1993～1998年、2003～2004年には20万トンを超えた。2006年以降から長期的な減少傾向にあり、2025年は8.0万トンであった。そのうち日本は5.9万トン、韓国は2.2万トンであった。

マアジ（対馬暖流系群）②





それぞれの指標値は、以下の値で表される。
長崎魚市、島根中まき、大中まき、幼魚調査は単位努力量あたりの漁獲量または採集尾数、着底調査、魚探調査は推定された現存量

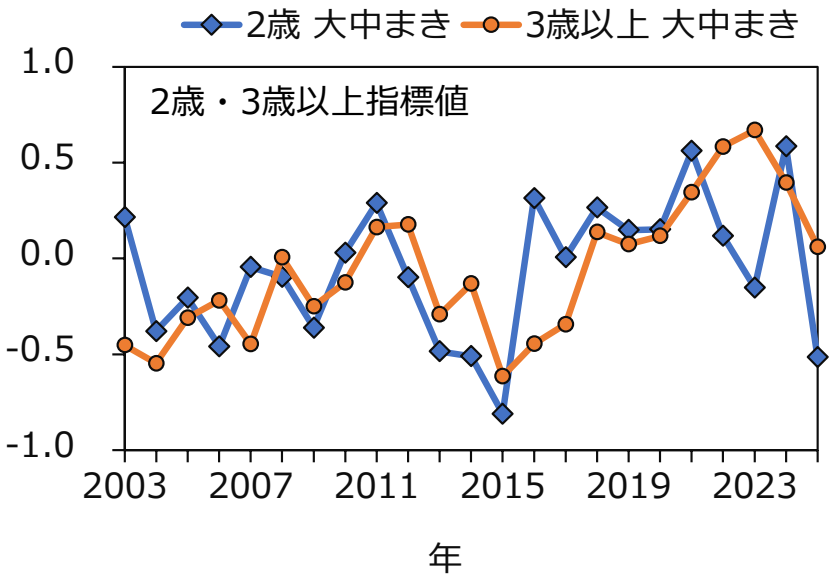


図4　年齢別資源量指標値の推移

年齢別資源量指標値には調査船調査の結果や漁況を反映した値を用いた（各指標値は平均値で規格化した後、対数をとって示した）。2025年は2歳・3歳以上の指標値で低下がみられた一方、0歳・1歳では前年と比較して増加しているものが多かった。

マアジ（対馬暖流系群）③

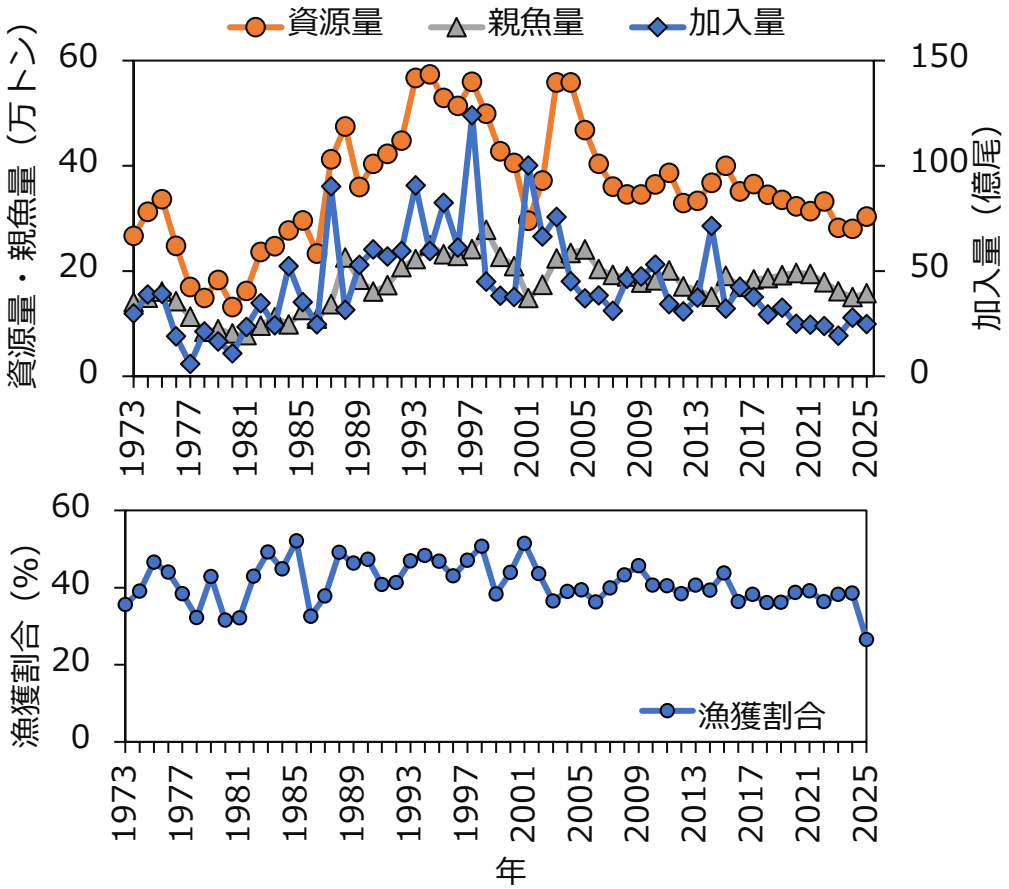


図5　資源量・親魚量・加入量・漁獲割合

資源量は2015～2024年は28.1万～40.0万トンの範囲で推移し、2025年は30.4万トンであった。加入量（0歳魚の資源尾数）は2020年以降、30億尾を下回り、低い水準にあると推定された。親魚量は直近5年間（2021～2025年）でみると減少傾向で、2025年には15.8万トンであった。漁獲割合は2016年以降ゆるやかに減少し、2025年は26%と大きく減少した。

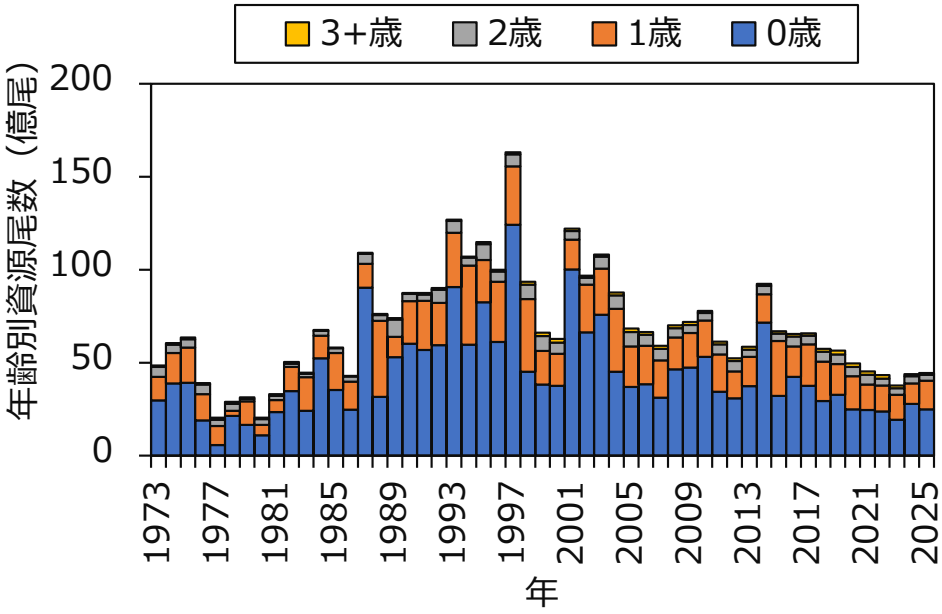


図6　年齢別資源尾数

0歳魚と1歳魚の占める割合が高い。近年では、2014年に0歳魚尾数が多かったが、2015～2019年は29億～42億尾で推移し、2020年以降は20億尾台と低い水準が続いている。

マアジ（対馬暖流系群）④

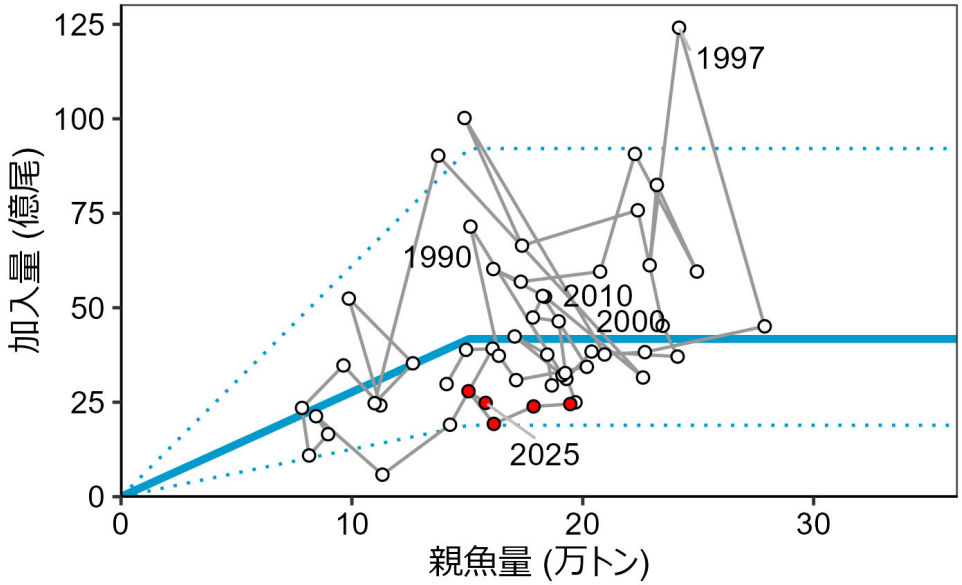


図7　再生産関係

1973～2023年の親魚量と加入量に対し、ホッケー・スティック型再生産関係（青太線）を適用した。図中の青点線は、再生産関係の下で、加入量の90%が含まれると期待される範囲である。

白丸は2026年度資源評価の観測値で、赤丸は直近5年間の観測値である。

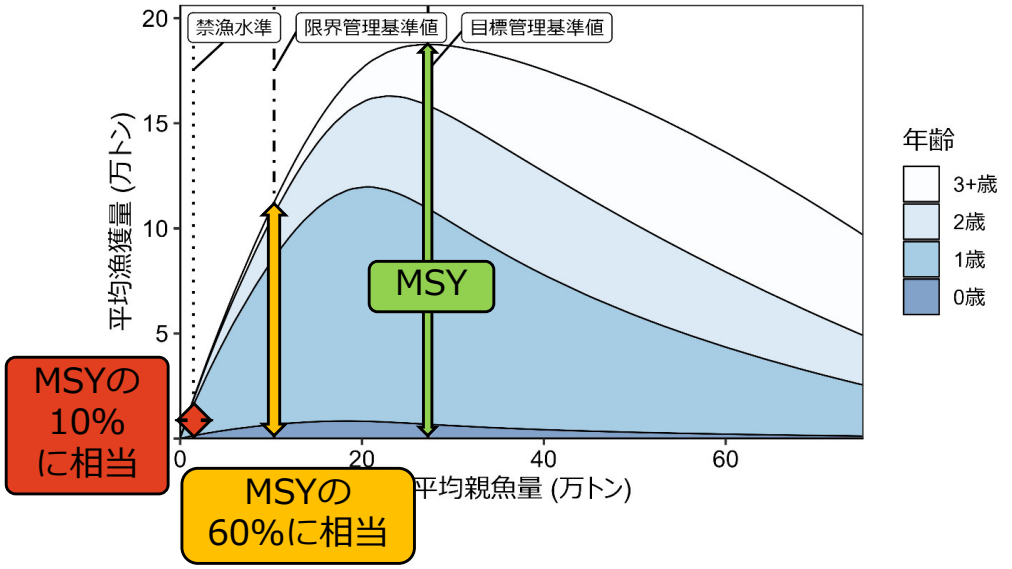


図8　管理基準値

最大持続生産量（MSY）を実現する親魚量（SBmsy）は27.3万トンと算定される。目標管理基準値はSBmsy、限界管理基準値はMSYの60％の漁獲量が得られる親魚量、禁漁水準はMSYの10%の漁獲量が得られる親魚量である。

目標管理基準値	限界管理基準値	禁漁水準	2025年の親魚量	MSY	2025年の漁獲量
27.3万トン	10.3万トン	1.4万トン	15.8万トン	18.7万トン	8.0万トン

マアジ（対馬暖流系群）⑤

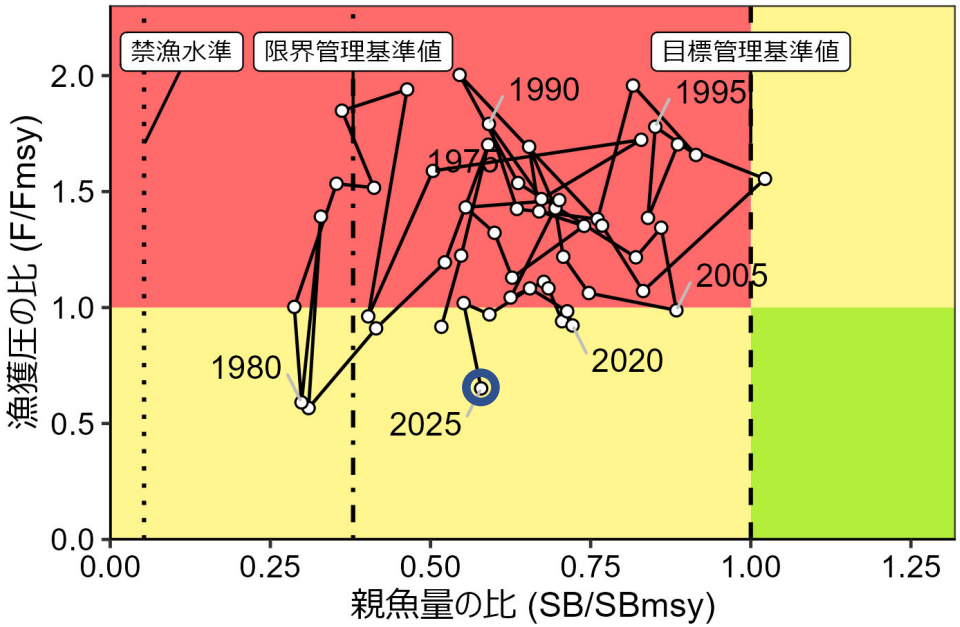


図9　神戸プロット（神戸チャート）

親魚量（SB）は、1998年以外は最大持続生産量（MSY）を実現する親魚量（SBmsy）を下回っており、2025年はSBmsyの0.58倍であった。

漁獲圧（F）は、2016年以降、SBmsyを維持する漁獲圧（Fmsy）に近い値で推移していたが、2025年はFmsyの0.65倍となった。

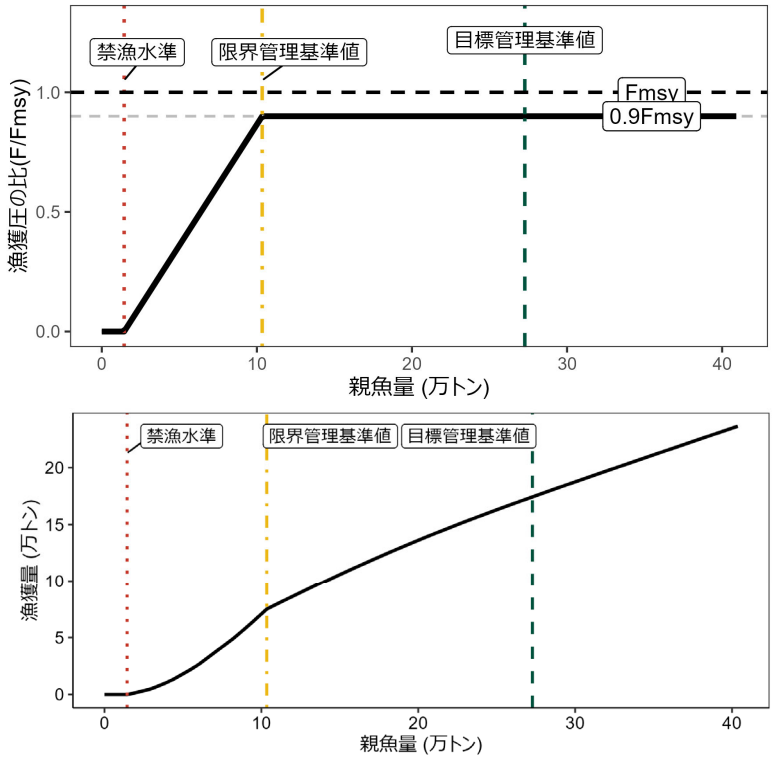


図10　漁獲シナリオ（上図：縦軸は漁獲圧、下図：縦軸は漁獲量）

漁獲シナリオ（調整係数であるβ=0.9）を黒い太線で示す。下図の漁獲量については、平均的な年齢組成の場合の漁獲量を示した。

マアジ（対馬暖流系群）⑥

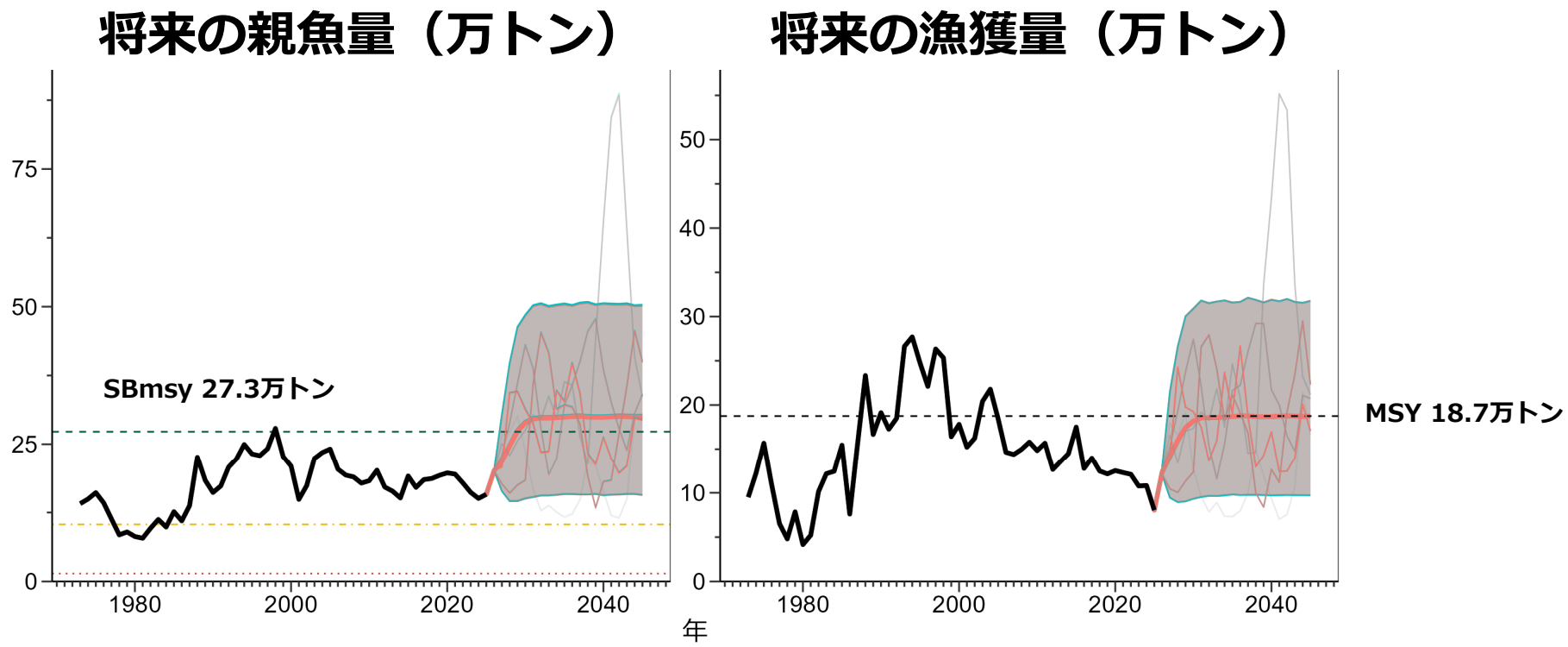


図11　漁獲シナリオの下での親魚量と漁獲量の将来予測（現状の漁獲圧は参考）

漁獲シナリオ（β=0.9）に基づく将来予測結果を示す。

平均値としては親魚量はSBmsyを上回った後、漁獲量はMSY水準に達した後、ともに横ばいで推移する。

マアジ（対馬暖流系群）⑦

表1. 将来の平均親魚量（万トン）

β	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035	2036	2036年に親魚量が目標管理基準値（27.3万トン）を上回る確率
1.0	20.1	21.8	23.5	25.5	26.6	27.2	27.3	27.2	27.3	27.4	27.5	44%
0.9			24.7	27.4	28.9	29.6	29.7	29.7	29.8	29.9	30.0	54%
0.8			26.0	29.5	31.4	32.4	32.6	32.6	32.7	32.8	32.9	64%
現状の漁獲圧			24.8	27.5	29.0	29.7	29.9	29.9	29.9	30.0	30.1	54%

表2. 将来の平均漁獲量（万トン）

β	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035	2036
1.0	12.3	15.3	16.6	17.8	18.4	18.7	18.7	18.7	18.8	18.8	18.9
0.9		14.2	16.0	17.5	18.2	18.6	18.6	18.6	18.7	18.7	18.8
0.8		13.0	15.3	17.0	17.9	18.3	18.3	18.4	18.4	18.5	18.5
現状の漁獲圧		14.1	16.0	17.4	18.2	18.5	18.6	18.6	18.6	18.7	18.8

漁獲シナリオ（β＝0.9、赤枠）に基づき漁獲した場合の平均親魚量と平均漁獲量の将来予測を示す。2026年の漁獲量は、予測される資源量と現状の漁獲圧（2023～2025年の平均：β＝0.89相当）により仮定した。

この漁獲シナリオに従うと、2027年の平均漁獲量は14.2万トン、2036年に親魚量が目標管理基準値を上回る確率は54%と予測される。併せて、βを0.8～1.0の範囲で変更させた場合と現状の漁獲圧を続けた場合の将来予測結果も示した。

表3. ABC要約表

2027年のABC（万トン）	2027年の親魚量予測平均値（万トン）	現状の漁獲圧に対する比（F/F2023-2025）	2027年の漁獲割合（%）
14.2	21.8	1.01	33

注：表の値は今後の資源評価により更新される。

マアジ対馬暖流系群　2025年度評価結果からの変化とその要因

ポイント
- 2025年の漁況を評価に反映させた結果、近年の資源量・親魚量は下方修正され、2024年以前の漁獲圧は上方修正された（図1）
- 2025年の1歳魚の漁獲尾数（漁獲量）が予測を下回ったことから（図2）2024年級群の加入量は低く推定され、2025年以降の加入量も低いと予測された（図1）
- 2025年の2、3歳魚以上の資源量指標値※1が低かったため（図3）親魚量は低く推定された。これに伴い、2026年以降の予測される親魚量と漁獲量も2025年度評価に比べると低い水準となった（図1、2027年漁獲量：18.7万トン→14.2万トン※2）
- 一方で、2025年の推定漁獲圧は、昨年度評価で想定した漁獲圧より低かった（図1）

※1 資源量指標値：資源量を反映していると考えられる指標　※2 2027年のABCに相当

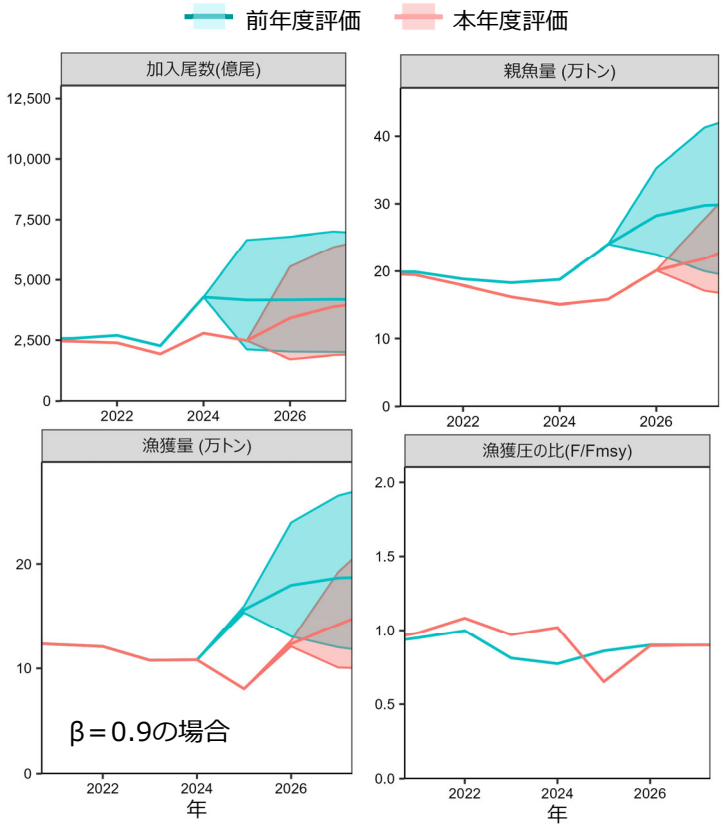


図1　本年度と前年度の評価結果

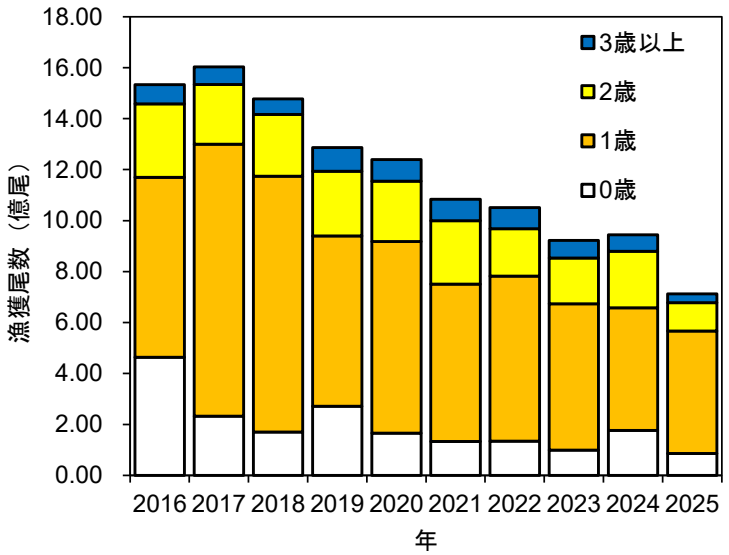


図2　年齢別漁獲尾数

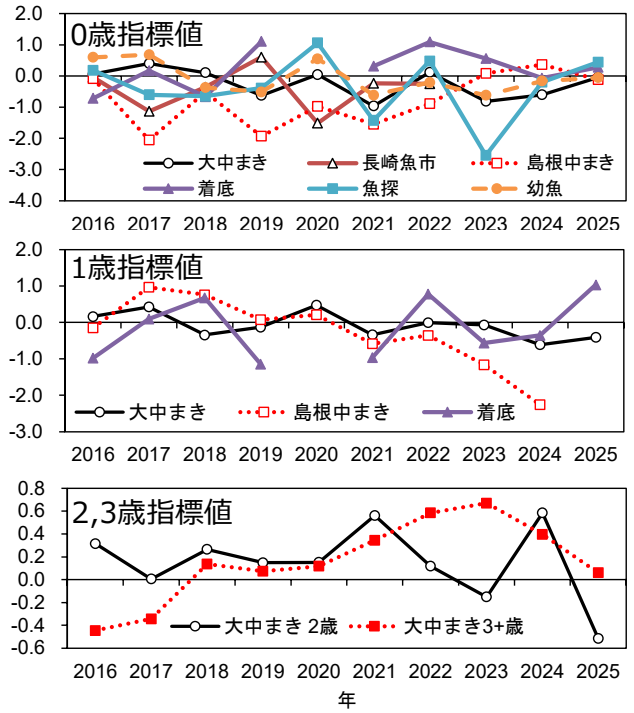


図3　資源量指標値

今後の資源動向に関する留意点
- 評価更新毎に過去の資源量が下方修正される傾向が見られることから、直近の資源量などについても過大推定となっている可能性がある
- 近年は平均的な加入水準を下回る加入量が続いているため、今後も低加入が続く可能性がある
- これらを踏まえると、今後の資源状態は予測を下回る水準で推移する可能性もある